The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学看護学雑誌　7巻1号 編集後記
Author(s)	鈴木, 敦子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2001, 7(1), p. 60-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56890
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

編 集 後 記

第6巻に続いて編集の後記担当になりましたので、前回に関連させて書かせていただきます。哲学者中村雄二郎氏が、２１世紀に持ち込める唯一のものとして、「助ける・助けられる」ことへの価値の転換をあげています。そのなかで、客観性と論理性と普遍性に基づいた「北型の知」は、科学的な学問としての「医学」を発達させたのに対して、「開かれた感受性」をもつ「南型の知」は、古来から「医療」と呼ぶべき文化を守ってきており、「助ける・助けられる」価値観は「南型の知」のなかにこそ存在していることを指摘しています。

彼のいう「医療」とは、人間相互行為であり、それはコスモロジー・シンボリズム・パーフォーマンスという三つの要素から成り立っています。コスモロジーとは有機的空間、シンボリズムは象徴というよりは物事の多義性、パーフォーマンスは身体的相互行為です。身体的相互行為のない「医療」というのはあり得ませんし、「医療」はひとつの有機的空間のなかで、物事の一義的ではない多義的表現を通し、互いの身体性を含んだコミュニケーションをします。つまり、これらは「北型の知」が重視する普遍性・論理性・客観性とまったく対立したものなのです。古来の「医療」から失われたもの、近代医学の裏側に隠れてしまったものは何かを考えたとき、私たちは「臨床の知」として、「南型の知」をたずさえて２１世紀へとやってきたでしょうか。こんなことも含めて、<看護>にたつこの雑誌がもっともっと活発な議論の場になることを願っています。とくに21世紀を担う若い方々の投稿を期待しています。

なお、皆様のご意見をふまえて、編集委員会で投稿規程に一部修正を加えましたのでご確認ください。

（編集委員長：鈴木敦子）

編 集 委 員 会

委員長　鈴木　敦子（大阪大学医学部保健学科母性・小児看護学講座）
委　員　福岡　富子（大阪大学医学部附属病院看護部）
　　藤本　春美（同上）
　　荻野　敏　（大阪大学医学部保健学科成人・老人看護学講座）
　　牧本　清子（同上）
査　読　荻野　敏　（同上）
　　牧本　清子（同上）
　　高木　洋治（大阪大学医学部保健学科母性・小児看護学講座）
　　里村　節子（大阪大学医学部附属病院看護部）
　　京力　深穂（同上）